

— かもじづくりに使われる道具 —

マンガン

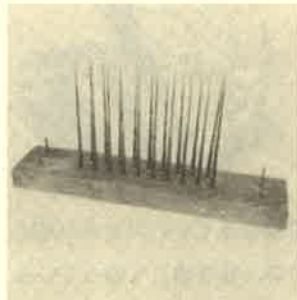
「揚げ地仕上げ」の作業のなかで使われる道具です。松の木でできた厚板の台に、鉄でできた先のとがった針棒が前後2列に並べてあります。

マンガンを使う時には、両はしに打たれたクギで短い針棒の列を前にして作業台に固定し、油抜きをした後の、からまったり、もつれたりしている毛を針棒に何度も通して、毛のからみやもつれを解いていきます。(かもじづくりの工程を参照)

ハコグシ

「抜き地仕上げ」の作業のなかで使われる道具です。手で握れるように柄のついた箱に2個のクシを固定させてあります。

ハコグシを使う時には、左手でクシの部分を手前に向けて柄を握り、すきそろえる毛を右手で引いてクシに通し、長さが同じになるように分けそろえます。(かもじづくりの工程を参照)



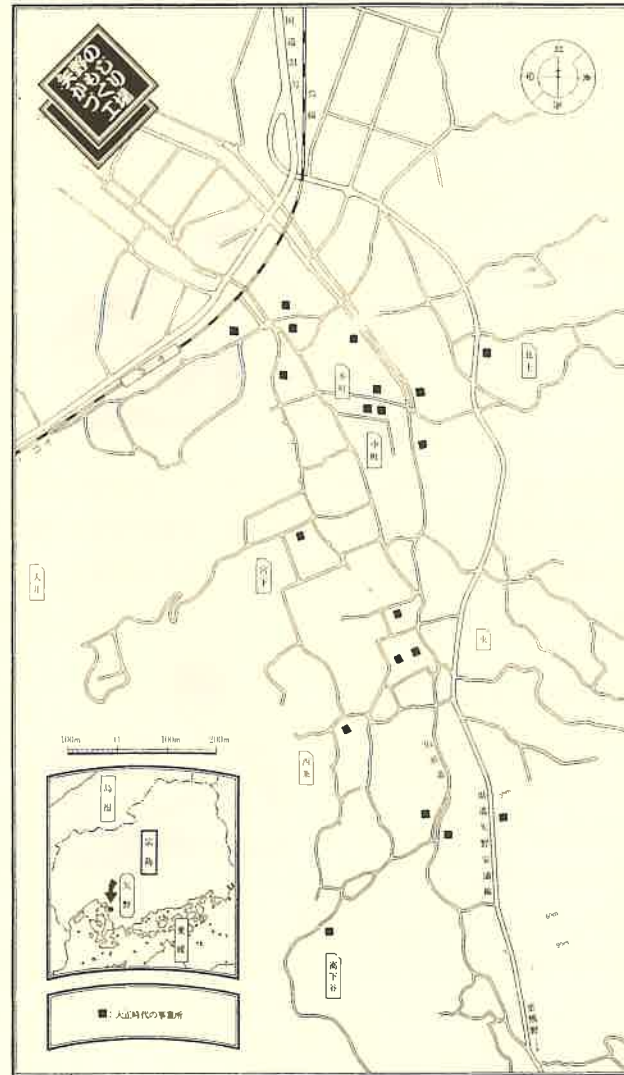
マンガン



ハコグシ

— かもじづくりの町 矢野 —

広島市東部の安芸区矢野町でかもじづくりは行われていました。矢野町でかもじづくりが盛んになったのは油抜きに必要なひげ土と呼ばれる粘土が町内でとれることや、谷あいから流れ出た豊富な水が町内を流れ、かもじ洗いに適していたことなどがあげられます。



学習の手引

第5号



かもじづくり

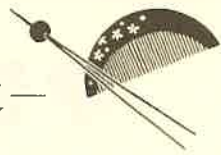


婦女髪様 (西区小川 新氏所蔵)

広島市郷土資料館

〒734-0015 広島市南区宇品御幸二丁目6番20号
☎ (082) 253-6771

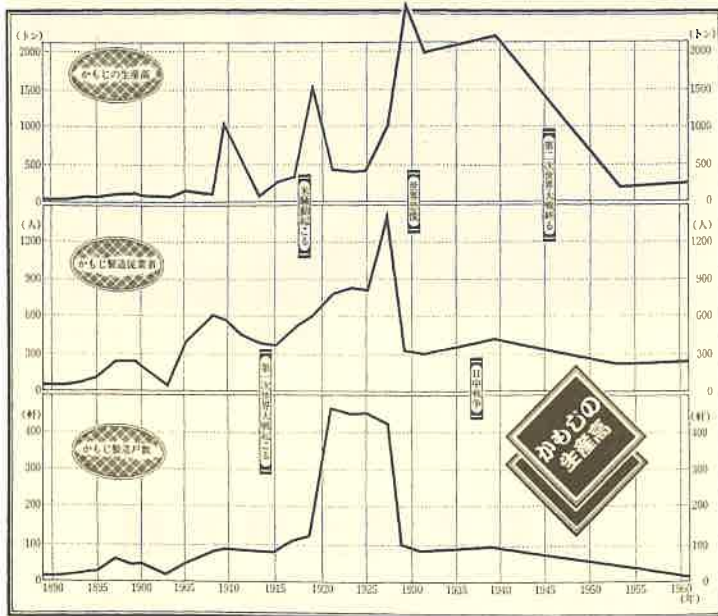
— かもじづくりの歴史 —



かもじというのは、女性が自分の髪（地毛）で日本髪を結うときに、髪型をととのえるために、中に入れこんだり、添えたりするものをいいます。

かもじづくりは、江戸時代の初めごろ、寛永年間（1624～1644）に矢野の大坂屋吉兵衛が始めたと伝えられています。矢野町内に残る「かもじの碑」は、かもじづくりについて研究するための貴重な資料です。

かもじづくりは明治時代の終わりから昭和の初めにかけて最も盛んに行われ、昭和2年（1927）には町内に430軒、1,386人の人がかもじづくりを行っていたという記録があります。



— かもじづくりの工程 —

• 玉毛の油抜き工程

玉毛（からまったり、もつれたりしている毛）についている油やほこりなどを落とすため、アルカリ性の粘土（ひげ土）に少量の水を加えて釜に入れ、そこに玉毛を入れて2～3時間蒸します。蒸した後は、まだ熱いうちにカマの中の粘土を玉毛とさらになじませるためヌキイタでたたき、粘土に油やほこりなどをすいとらせます。



• 解きそろえ工程

油抜きをした玉毛を竹の竿にかけて日に干し、乾燥させた後、解きほぐし、毛の長さをそろえます。ここまでの工程を「揚げ地仕上げ」といいます。この工程の中でマンガンを使って、手づかみできるぐらいの量の玉毛を何度も針棒を通して、毛のもつれを解き、ととのえる作業を「解きそろえ」といいます。



• 角沙仕上げ工程

「揚げ地仕上げ」の工程の中で、解きそろえのすんだ玉毛を、さらにカネグシとアラメと呼ばれるキグシを使ってとかし、すきそろえます。こうしてできあがった毛を片手で握れるぐらいの太さにまとめたものを「角沙」といいます。角沙になるといらぬ玉毛がとりのぞかれるため、最初の玉毛の量の半分ほどになります。



• 染色工程

角沙を美しい黒髪に染めあげるために、釜に水を入れ、昔はハゼの葉や実といったしょに、のちにはヘマチン・ロフンドと呼ばれる化学染料を加えて3～5時間煮ました。角沙を染めるのは、角沙の中にまじった白い毛や赤い毛をとりのぞく手間をはぶき、美しくそろった黒髪にするために行われはじめました。



• 色止め、光沢つけ工程

染めた角沙の色落ちがないように、ローハ（成分は硫酸鉄）と呼ばれる薬品を加えて、釜で3時間ほど煮て、そのまま一晩つけておき、そのあと、流水で水洗いをします。髪に光沢（つや）をつけるため、さらにカセイソーダを加えて釜で煮こみます。水洗いした後に竹の竿にかけて乾燥させます。後にはカセイソーダのかわりに、洗たく石けんが使われていました。



• 抜き地工程

染色のすんだ角沙をハコグシを使ってすき通し、同じ長さの毛にそろえて床に並べます。この時に長さをそろえるためにスニタを使います。分けられた毛は片手で握れるぐらいの太さの束にされて「抜き地」となります。この「抜き地」を使っていろいろなかもじ製品はつくられます。

